

第 58 号

会報

青山学院大学
日本文学会

2024 年 3 月 18 日

(題字) 湯地 孝先生



ご挨拶にかえて (附昔話)

日本文学会会長 片山 宏行



すが、落ち着いたらゆっくりご覧になってください。

二〇二三年度ご卒業のみなさん、ならびに二〇二四年度新入生のみなさん、それぞれに新しいステージに踏み出されたことをお喜び申し上げます。

また、二、三年の在学生のみなさん、心機一転、大いに学生生活を充実させていたがたいと思います。

さて、この冊子は本校日本文学会の『会報』誌です。今は卒業、新学期の慌ただしさや、一度に渡されるさまざまな書類にまぎれて、どれが『会報』なのか判然しないと思いま

すが、落ち着いたらゆっくりご覧になってください。そもそも「日本文学会」とはなんだろう？と新入生のみなさんは（あるいは在学生の一部もいまだに）思われるでしょう。実は日本文学科に籍を置く学部生・大学院生と、専任教員は全員「青山学院大学日本文学会」という学会の会員Vなのです。この学会の目的は簡単にいうと、青山学院大学における日本語・日本文学・中国古典文学・日本語教育にかかわる学問・研究の研鑽とその成果を広く開示することにあります。

具体的に申し上げますと、『青山語文』という研究誌が毎年度発行されます。もらった書類のなかに深緑色の冊子があるでしょう。それが『青山語文』です。ここには、会員による日本語学・日本文学・中国古典文学・日本語教育にかかわる最新の研究成果が掲載されています。「会

員による」のが基本ですから、執筆者は教員・院生のみならず学部生のみなさんも当然執筆する資格を持っています。

研究論文ですから感想文レベルのものを載せることはできませんが、編集委員による審査(査読)があつて、各分野において現在の研究に資すると目されたものが掲載されます。では学部生には無理だろうと思われるかもしれませんが、採用された例がこれまでにいくつもあります。普段の授業、ことに演習(ゼミ)や卒業論での成果がその原石になります。指導する先生はそこをよく見えていますから、大いに勉強してください。

ほかに日本文学会の活動としては、春と秋に行われる「大会」があります。ここでは研究発表のほかに、さまざまなゲストをお招きしてとて興味深い、あるいは刺激的な御講演をうかがうことができます。卒業生や一般の方も含めて、大教室で開催します。

*

ずいぶん昔のことですが、ゼミ対抗の発表会のようなものもありました。三年生(当時は二年ゼミは無し)が、ゼミで発表した者のなから、これはと思うものを大会で発表する

のです。個人発表やグループ発表などいろいろで、一組十五分くらいのもち時間でやりました。学術的なレベルを競うのが主眼ではなく、もっぱらゼミ紹介に近いものでしたが、発表する方は真剣に、先生方はニコニコと聞いていらつしやいました。

不肖ながらわたしも参加して、そのときゼミで扱ったばかりの森鷗外（森鷗外）の歴史小説について、発表をしました。今思えば無邪気なものでしたが、それでも精一杯の勉強をしたので、そのまま四年次の卒業論となり、このときに感じた研究の面白さにひかれて大学院に進み、さらに修論へと広がり、『青山語文』に初めての論文を書かせてもらいました。思えばこのときの発表が、わたしのその後の研究生生活の原点だったのかもしれない。

それから『会報』で思い出すのは、当時、「先生訪問」といった記事が毎回ありました。日文の専任の先生のご自宅に編集委員たちがお邪魔して、インタビューのようなことをするわけです。教室では見えない先生方のくつろいだお話を伺うことができ、なかなか評判の企画でした。もう四十年ほど前のお話になりましたが――。

春季大会講演印象記

ご講演…大上正美先生

「中国古典詩人の生の矜持——陶淵明と杜甫の「拙」——」

博士後期課程一年 西澤 駿介

二〇二三年六月一七日（土）、青山学院大学日本文学会春季大会が開催された。今大会は、本学名誉教授である大上正美先生に「中国古典詩人の生の矜持——陶淵明と杜甫の「拙」——」と題してご講演をいただいた。ここでは、その講演の一部を紹介したい。

講演の題目には「矜持」とある。まず語られたのは「矜持」ではなく「矜持」であることの意味だ。さしあたって、ポケット版の辞書など開いてみると「矜持」と「矜持」は同じ意味の言葉として括られ、意味は「誇りを持つこと」、悪く言えば、人に見せ付けるような意とする。しかし、この二つの言葉は根本的に異なっているという。というのも、「矜持」の「持」

は、「頼む」の意であり、自己の誇りを頼りとするのが「矜持」の意だからである。すなわち、題目に「生の矜持」とあるのは、陶淵明と杜甫の生涯を辿ってゆくと、政治の荒波に彼らの信念がゆらぎながらも、自己の誇りを頼りとする、その様を「つたなさ」を意味する「拙」という自己認識の表現を通じて見届けようとするものだからだ。

陶淵明は、しばしば隠逸詩人の祖と称される。当然のことながら、隠逸は世の中を避け、人との関わりを断つ。それゆえ、隠遁している人たちは本来、言葉を残さない。けれども、陶淵明は隠遁を生きる自分について述べている。ここに隠逸詩人と称される所以がある。とはいえ、陶淵明の隠遁の志向がまっすぐに形成されたわけではない。帰隱に至る思いは「帰園田

居五首」で、若い頃から役人社会に合わせて生きていくことが苦手で、「少くして俗に適うの韻無く」、そのような俗世界に誤って落ちていったが（誤りて塵網の中に落ち）、自らの本性は自然を愛することであり（性は本邱山を愛す）、その本性を守って田園に帰ってきた（拙を守りて園田に帰る）と述べる。つまり、役人社会では巧みに生きることができない（拙）けれども、自然を愛するというあるがままの自分の本性を大切にすることが陶淵明の「拙」なる自己認識であった。このような「拙」という自らの内面的な本性に価値を置くことに「拙」に対する捉え方の新しさがあると説く。

例えば、自らの抱く政治的理想に至ることができない無念さを「拙」に表していた。こうした「拙」は、政治的空間からきっぱりと身を引いて隠逸した陶淵明の「拙」とは対照的で、政治的・社会的志向の強い「拙」なる自己認識を持っていたのが杜甫であった。

一方で杜甫の「拙」はいかなるものであろうか。同時代の王維や李白に比べ、杜甫は「拙」なる自己認識を強く持っていた。それを杜甫の生涯と同時代の歴史とを重ね合わせ、「自京赴奉先県詠懷五百字」「北征」「発秦州」「発同谷県」を読み解き、杜甫の「拙」を描き出す。たとえば「北征」の「益ます身世の拙なるを嘆く」とは、官吏としての無力さ、さらに

かような「拙」という問題系は、中国文学だけにとどまらないように思われる。たとえば、それは大伴家持の「拙懐」ともどこか響き合う。不遇感を深め帰京し、「拙懐」なる歌（19・四二八五〜八七題詞、20・四三一五〜二〇左注、四三六〇題詞）を詠み、巻二〇末部の歌では山川への隠逸を歌う（20・四四六八）点などは、陶淵明との重なり（と差異）を想起させる。あるいは、「拙」という自己認識が概して政治と密接な関係にあることを思えば、この問題は（政治と文学）というより大きな問いにまで広がってゆくだろう。大上先生のご講演は、そのような想像力を逞しくさせたくなるほどの内容であった。

今大会は、前年の秋季大会に引き続き、対面で開催された。春季大会の対面開催は、実に四年ぶり

である。会場には教員や在学生、卒業生など多くの方々にご参加をいただいた。その数は当初用意していた座席を優に超え、休憩時には座席を増設するにまで至った。大上先生のご講演を聴き、多くの方々が豊かな時間に包まれていたことを記して記憶しておきたい。



秋季大会講演印象記

ご講演・亀井ダイチ利永子先生

『学生よ、好奇心を抱け』：Students, be curious!
白居易からMedieval Japanese Historyの世界へ

博士前期課程一年 下園 理紗

二〇二三年十一月二十五日に開催された青山学院大学日本文学会秋季大会では、亀井ダイチ利永子先生のご講演、『学生よ、好奇心を抱け』・白居易からMedieval Japanese Historyの世界へ」を聞かせていただきました。

ご講演の前半では、先生の大学時代から今までの経緯についてお話しいただきました。大学時代に漢文学ゼミに入り白居易の研究をした後、博士前期課程において今度は平安初期の勅撰漢詩文集についての研究をし、更にその後、波乱万丈な数年間を経て、海外の大学で中世日本史に関する研究を始めるという、漢文学の分野から史学の分野に至るまでのお話は、まさに「好奇心」による研究世界の

広がりを感じさせられました。

ご講演の後半では、先生の日本中世史研究について、中世初期の人物である西園寺公経を例としてお話しいただきました。中世初期、西園寺家がどのようにして栄華を誇ったのか。そこには、天皇家や



鎌倉將軍家、摂関家などの有力な他家との姻戚関係による社会資本、航路の要衝を荘園として抑えた上に貿易によって得た経済資本、姻戚関係を駆使して和歌や琵琶の分野で地位を確立させた文化資本の三つの要素があったということです。特に文化資本に関するお話の中で、和歌の有力者である藤原定家と西園寺公経が近い姻戚関係であったこと、定家の日記に西園寺家との交流の証拠が見られることを知り、作品のテキストを文学的視点で見ただけでは分からない、史学という別の視点から作品を見ることで分かることの可能性を感じ、今まで日本文学という枠から出た考えをなかなか持つことができなかった自分は、目から鱗が落ちた心地になりました。

また、英語で論文を書く際にどのように文や単語を訳すか、例えば、鎌倉時代の戦士としての「武士」と江戸時代の社会的身分としての面が強、「武士」を、同じ「Warrior」という単語で示して良いのかといった、別言語への翻訳をする際に起きることについてのお話も大変興味深かったです。

先生のお話の全体を通して強く

国際シンポジウム報告1

青山学院創立150周年記念国際シンポジウム 「日本文学の翻訳・翻案・アダプテーション」

日本文学教授 小松 靖彦

二〇二三年三月二六日(日)に、オンラインで、青山学院創立一五〇周年記念国際シンポジウム「日本文学の翻訳・翻案・アダプテーション」が開催された。日本文学科と中国・復旦大学外国語文学学院日語文系が主催したこのシンポジウムの趣旨文を引用する。

「近代中国における日本古典文学の翻訳と研究は、一九二〇年代に上海で始まる。上海は、現在に至るまで古典文学・近代文学を問わず、日本文学の翻訳と研究の重要な拠点となってきた。その中心的存在が復旦大学である。今日、復旦大学では、近代日本文学における海外文学の翻訳、演劇化などのアダプテーションの研究が進め



印象に残ったのは、「好奇心を抱き、いかに行動するか」ということです。ご講演の最後に、先生は「好奇心をお供にその先へ」とおっしゃいました。日々研究していく中、あるいは日常を過ごす中で色々なことに興味関心を持ちますが、時にその興味関心を諦めたり、次の段階に広がることなく留まってしまうこともあります。しかし今回のご講演を聞き、好奇心をただ抱くだけではなく「その先」へ進むこと、物怖じせず未知へ飛び込んでいく勇氣を持つことの大切さを学ぶことができました。

られている。上海における日本文学の中国語訳、翻案・アダプテーションの研究に、日本側から応答しつつ、翻訳・翻案・アダプテーションとは何かを、理論的に捉え直す。英語圏とは異なる条件にある日中の文学交流を通じて、翻訳学の新たな地平を拓きたい。」

シンポジウムの発表者は以下(敬称略)。
還流する『萬葉集』——その中国語訳のもたらしたもの——

小松靖彦(青山学院大学)

近代翻訳小説の受容とメディア

——黒岩涙香訳『野の花』と中国

—— 鄒波(復旦大学)

『幽秘記』にみる露伴の翻案態度

謝六逸と平安朝文学——切り落

としたもの——の可能性——

西野入篤男(桐朋女子高等学校)

そして、片山宏行(青山学院大

学)、陳継東(青山学院大学国際政治経済学部)、李満紅(茨城大学)がコメンテーター、田中祐輔(青山学院大学)が司会を務めた。

小松は、一九二〇年代に上海で謝六逸によって行われた白話体による『萬葉集』中国語訳が、中国伝統詩歌の(詩)の概念への挑戦であったことを論じた。鄒波氏は、冒頭で復旦大学初代総長・馬相伯が『新訳聖書』などを翻訳したことを紹介後、バーサ・M・クレイの *A Woman's Error* の黒岩涙香訳『野の花』が、包天笑によって『空谷蘭』として訳され、さらに新劇・映画・地方劇として中国で広く受容され定着してゆく過程を明らかにした。王菁潔氏は、幸田露伴の、中国の歴史書や詩話を翻案した作品集『幽秘記』(一九二五)を、文学の範囲を広げよ、という露伴の主張の上に立った、「近代小説」とは異なる可能性の追求であったと捉えた。西野入氏は、中国に初めて体系的な日本文学史を紹介した謝六逸が日本漢詩を切り落としたことの問題を指摘しつつ、和歌に漢訳を添えた『新撰萬葉集』に、日本と中国の言語的・文化的・社会的・思想的などの諸

要素交差を解明する可能性があることを具体的に提示した。

三人のコメンテーターからは、日中間文化・思想交流における相互排除の克服は可能かという本質的問題提起や、日中における一九二〇年代の交流とは何であったかという問いかけがあった。また、なぜ翻訳の対象として涙香が好まれたか、『萬葉集』の漢詩・漢文はどのように中国語に翻訳すればよいのかなどの具体的質問も寄せられた。議論を通じて、中国における口語体搖籃期において日本文学翻訳が果たした役割、漢字・漢文という言語基盤の重要性などが明らかに、欧米語間、日本語・欧米語とは異なる翻訳・翻案のあり方が浮かび上がった。

事前登録者は約二〇〇名。オンラインの特徴が活かされ、中国各地から多くの参加があった。シンポジウムの成果は、新たな執筆者を加え、『翻訳新論』として文学通信から刊行予定である。

国際シンポジウム報告2

講演会「唐物の神能における中国のイメージ」 『東方朔』『西王母』『菊慈童』『鶴亀』をめぐって

日本文学科准教授 滝澤 みか

二〇二三年七月一日(土)に、本学科ではシンガポール国立大学日本研究学科准教授のリム・ベンチュウ (Lim Beng Choo) 先生を青山キャンパスにお招きし、「唐物の神能における中国のイメージ」―『東方朔』『西王母』『菊慈童』『鶴亀』をめぐって―という題目でご講演を行っていただいた。リム先生は能を中心とした日本の伝統芸能・文学の研究を長年積み重ねられており、ご自身でも能のお稽古をされている。現在では日本の伝統芸能とデジタルテクノロジーに関するプロジェクトや、能における中国の表象に関する研究を進めておられ、現代文化にもご関心の幅を広げているとのことである。能は室町時代に成立以降、各時

代で親しまれ続け、そして現在でも鑑賞されている日本の古典芸能の一つであり、現行曲の数も多い。今回のご講演では、その多くの演目の中でも、『東方朔』『西王母』『菊慈童』『鶴亀』という、「神能」として分類されるもののうち、とりわけ中国(唐土)を舞台とした唐物の能である四つの曲に焦点を当て、他の作品とも比較をしながら、能に見える唐土の記述やイメージがどのように変わっていくのかを探るものであった。それにより、中世の人々の中国観とそれらがいかに繋がるか、つまりは中世における能の作者と観客とが中国をいかに想像して捉えていたのかを考察していくことを目指されていた。

当日の司会は韓京子先生が務めて下さり、さらに開会に先立ち、今回の学術交流を進めて下さった

小松靖彦先生より挨拶があり、シンガポール国立大学の日本研究学科の歴史も紹介された。その創立には国文学者の糸川光樹氏が関わっており、リム先生も卒業論文で『風姿花伝』を取り扱われる中、ご指導を受けていたとのことである。

ご講演では、能の歴史や神能の特徴、そして『風姿花伝』における唐物の能に関する記述を解説の上、具体的な作品分析をお話いただいた。特に『東方朔』『西王母』『鶴亀』の三作品は、いずれも祝

第五十八号 目次

巻頭随筆	2
春季大会講演印象記	3
秋季大会講演印象記	4
国際シンポジウム報告①	5
国際シンポジウム報告②	6
研究レポート	7
就職活動	
みなさんへのメッセージ	10
大学院に進学して	12
アンカラ大学と学術協定を締結	13
留学生の動向	13
今年度の学生の活躍	14
日本文学科関係書籍	14
院生部会報告	15
研究室探訪①山口先生編	16
研究室探訪②大江先生編	18
日本文学科同窓会から	20
二〇二三年度講義題目	20
研究室だより・編集後記	24



研究レポート

『剣巻』と御伽草子『羅生門』における渡辺綱の人物造形の比較

四年 佐藤 めぐみ

源頼光と渡辺綱の鬼退治は様々な作品の中に現れる話の一つであり、『平家物語』などと組み合わせたり広まった『剣巻』（鎌倉・南北朝成立か）と、江戸時代に広く

民衆に普及した御伽草子『羅生門』（江戸初期成立）にも彼らの話が書かれている。この二つの作品では綱の造形に明らかな違いが見られるため、綱の性格に着目し、二つの作品を比較してみたい。

『剣巻』は綱が戻り橋にて鬼を退治し、その後、物忌みをする構成となっている。この作品では綱の性格は人情深い人物として書かれていると考えられる。例えば女（正体は鬼）が夜道を怖がっていると「綱急キ馬ヨリ飛下テ、「サラハ御馬ニ被」召候ヘシ」とあるように、「急キ」馬から飛び下りて、夜道を怖がる女を乗せて送っている。これは見知らぬ女性を急いで助けようとする綱の優しさが読み

取れる記述と言える。加えて、その女を送る途中で、女が都の外まで送ってほしいと伝えると、綱は「サ承候。何クニテ候トモ、女房ノ御渡有ン所へ送り奉ルヘシ」と話し、どこへでも送ると答えていることから人情深さが窺える。また、乳母に化した鬼が綱の家に行き、物忌のため家に入れず恨み言を言う場面がある。それに対する綱の応答を次に挙げてみよう。

綱、実ニ道理ト思ヒケレハ、
我身ハ何ニ成トモ、此ヲ聞ナ
カラ有ヘキカハト思ヒテ申ケ
ルハ、「不」斜大事ニテ、堅
キ物忌ニテ侍レトモ、誠ニ宣
フ事道理ナレハ、入り給ヘ」
トテ、門ヲ開テ入テケリ。

綱は乳母への孝行を果たすことが重要だと考え、物忌であるにもかかわらず家の中に化した鬼が入れている。さらにその化した鬼が、綱が切った鬼の腕を見たがる場面は次の通りである。

気色恨メシクニ見ヘケレハ、綱
又思ケルハ、此ヲ不」見セハ、
亦モヤ不孝セラレスラン、如

言性が高いことに触れ、物語が何か展開されるわけではないことを共通点として指摘された。そしてそこに示される唐土も、良いイメージが持たれていることは窺えるものの、具体的には語られず、理想的な世界が書かれているに過ぎないという。このような唐物の神能が成立するその理由を探るにあたり、作品が形成されていく時代にリム先生は着目されていた。すなわち、この三つの曲の原型は早くから存在し、その早い時代における唐土への憧れが反映されているからこそ、不老不死のような理想的な世界がこれらの作品に示されているのではないかということである。その一方、例えば『白楽天』を比較すると、『東方朔』『西王母』『鶴亀』に見られる唐土のイメージとはずれがあり、室町時代における中国に対する認識は変化しているのではないかということを作品の内容から分析されていた。すなわち、成立した時代とイメージの変容を検証したご講演であったと言えよう。

ご講演後、コメンテーターとのやりとりを経て、参加者との質疑応答となった。憧れという捉え方



を掘り下げるものや、『白楽天』という作品そのものについて、あるいは他作品との比較、皇帝に対するイメージといった多岐にわたる質問と、司会の韓先生による丁寧なコメントにより、今後多くの課題に展開していく可能性を感じさせるものであった。質問は学内者のみならず学外からの参加者からもされ、参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。

なお、文学通信から講演録も今後刊行される予定であり、ご講演や質疑の詳細はそちらに掲載されるため、ぜひご一読いただきたい。

何二成トモ見セ申サム、ケニモ
曉下給ハ、如何見セ奉ラテ
ハ可^レ有トテ、封シタル鬼ノ手
ヲ取出シテ、養母ニ見セケレハ

ここで綱は、乳母が望んでいるように鬼の手を見せなければ「不孝」だと考えている。つまり綱は孝行を大事にする人間としても造形されており、やはり人情深い人物と言える。

一方、『羅生門』では綱が羅生門にて鬼退治をし、その後、頼光が物忌みをする。『羅生門』では頼光の冷静さとは対照的に、綱は「気早」として書かれている。綱が藤原保昌と、羅生門に鬼がいるかどうかで口争いになった場面では、保昌に対して悪口を言い、彼の挑発に乗ってしまい、

たとひ筑紫・坂東のはてなりとも、鬼あるとだにいふならば、一人馳せ向つて退治せんに、何のおそれあるべきぞや。まして是程の事に、心を見えられまじ

と発言するように、綱は一人で鬼退治に向かおうとする。それに対

し頼光は次のように述べる。

頼光きこしめし、「しばらくしづまり給へ。まことに鬼神棲むならば、つるには隠れあるまじ。其時面々同心して、心静かに平ぐべき。あはて、見ゆるものかな」とひきとゞめ給へども

心を平静にするべきと綱を止める姿からは、頼光の冷静な様子が読み取れる。最終的に綱は「綱も保昌にて対し、遺恨申すにあらざ」と書かれ、一人で鬼退治に向かつており、「気早の男」として一貫して造形されている。

以上のように二つの作品では綱の性格は異なっており、各作品の一貫した意図により登場人物は造形されていると考えられる。綱の人物造形の変化を追うことは、時代ごとの武士の理想像や綱の伝説化の背景を探ることに繋がると考えられ、さらに他作品も含め、今後とも検証を続けたい。

【出典・参考文献】

『剣巻』：麻原美子、春田宣、松

尾葦江『屋代本・高野本対照平家物語』一九九三年、新典社

『羅生門』：島津久基『続お伽草子』

一九五六年、岩波書店

佐々木紀一『羅生門鬼退治説話の形成と『綱絵巻』』二〇〇四年四月、

『國語國文』八三六号

日本語の発話における感情表現

二年 鈴木 心緒

私たちは主に言語を介してコミュニケーションをとり、感情を共有することができる。ただ、日常会話においては「とても嬉しい」や「今悲しいの」などと自分の気持ちを直接言葉にせずともほとんど正確に相手に気持ちを伝えられる点から、私は気持ちを伝える話し方には特定のパターンがあるのではないかと考え、研究することとした。

日本語の発話において感情はどのように表現されているのか。重野(2004)では、「喜び」や「楽しさ」などのプラス感情は平均的に声のトーン(音調)が上昇し、「悲哀」などのマイナス感情は低めのトーンで長く伸ばして発音される傾向にあるが、マイナス感情の一

つとして分類できる「怒り」は必ずしもこの条件に当てはまらないとある。

以上から音の高低と感情の浮き沈みはたいいの場合リンクしており、それによってより分かりやすく相手に気持ちを伝えられるのだが、私たちはあえて基準からずれた表現方法をしていることもある。

基本的には「高いトーン」プラス感情」「低いトーン」マイナス感情」だが、これと反対の表現するほうが好ましい場合もある。それは気持ちをとり繕うときだ。例えば大切なものがなくなつて「大丈夫？」と聞かれた時に、心配をかけまいと平静を取り繕つて発する「大丈夫だよ」という言葉は、本来「辛い、悲しい」というマイナス感情を含んでいるにも関わらず高いトーンを用いる。あまり興味のない話を「そうなんだ」とさらっと流す時にも「つまらない、退屈」という気持ちを隠すように高いトーンで話す。お世辞も自ら同様だと考える。一方、プラス感情を低いトーンで表現する場合は、相手への配慮だと考える。自分が告白された直後に恋人と別れ

た友人から「二人付き合ってるの？」と聞かれたら、恋人ができた事の喜びを隠し、相手の状況を気遣って「あ：実は付き合うことになって：」と低めのトーンで言うだろう。このように、会話の相手に悟られたくない気持ちを隠そうとしたり、配慮したりしようとする、実際の感情と異なるトーンで発せられると考える。

また私たちはイントネーションだけでなく、反対に位置しているように思われる沈黙でも自己主張をすることが多い。沈黙でマイナスの感情を表現することが多いが、プラスの感情を表現することも可能である。ここで挙げられるプラスの感情は「深い感動」「深い喜び」などである。例えばとても感動する映画を見たあと、その感想をうまく言葉にできないのに「本当にすごかったね！すごく感動した！」とたくさん言葉を紡ぐよりも、沈黙を利用して「いやあ…、本当にすごかったね……！」

と言う方が感情をより伝えることができる。マイナスの感情を表現する時の沈黙は「深い悲しみ」「深い反省」「深い怒り」「拒否」で、例えば「残業してもらってもいい？」と上司から言われ、「……、はい。」と言うと本当は残業したくない、拒否したいけどできないから仕方なく残業するという意思を表現できる。

今回、日本語における感情表現について考えてみて日本語はトーンや沈黙によって感情を表現、または偽っていると分かった。現在、日本語教育現場でしばしば取り上げられるイントネーション矯正問題に対しては、音調が相手とのコミュニケーションにおいて重要なことを踏まえると、日本語学習者の発音は矯正すべきだと考える。

【参考文献】
天沼寧・大坪一夫・水谷修 (1978) 『日本語音声学』くろしお出版
重野純 (2004) 「感情を表現した音声の認知と音響的性質」『心理学研究』74(6)、pp. 540-546

林逋の詩詞と梅花
四年 泉 茉莉花

北宋の林逋は梅花表現において後の時代に強烈なインパクトを残した人物である。その代表作「山園小梅」に見られる「疎影」「暗香」

の語は、詠梅詩の流れに大きな影響をもたらしている。

「山園小梅 其一」
衆芳搖落獨暄妍
占盡風情向小園
疎影橫斜水清淺
暗香浮動月黃昏
霜禽欲下先偷眼
粉蝶如知合斷魂
幸有微吟可相狎
不須檀板共金尊

衆芳搖落して 獨り暄妍
風情を小園に占め盡くす
疎影横斜して 水清淺
暗香浮動して 月黃昏
霜禽下らんと欲して先ず眼を偷み
粉蝶如し知らば 合に魂を斷つべし
幸いに微吟の相い狎るべき有り
須ひず 檀板と金尊と

この詩の独特なところは、南朝の頃からうたわれてきた「梅花は春を告げる象徴、他の花に先がけて咲く」という詠梅の方法を踏襲せず、むしろその特徴を逆手に取って「他の花が散り切った後に、

ひとり咲いている」と表現したところにある。結果、この詩に登場する梅花は春の訪れを表す役割から脱却し、「春」という季節に自然と紐づけられてしまう華やかさ、浮きたったり焦ったりする人の気持ち、花を挿す美人の姿、などから切り離される。梅花は主人公と同じように「独り」であり、辺りは世間から隔絶されてひっそりとしている。それでも冷たさを感じないのは舞台となつている小園を梅花の気配が満たしていることや、主人公がそつと吟ずる声や「霜禽」の姿があるからだと考えられる。悠々自適に梅花と向き合う主人公の様子が印象的である。さらに、この梅花は早春の花として雪との色合いの調和を描く、春にこそふさわしい女性の美しさや華やかさと共に描くなどの制約から外されている。だからこそ三、四句目の、梅花の外見を言わずにその魅力を伝える言葉「疎影」「暗香」が効果的に使用できるのである。

林逋が詠じ、人口に膾炙した「山園小梅」を見てみると、林逋の梅花に対する態度はこの詩に表されているものが全てであるように感じられる。しかし林逋は詞におい

て梅花を表すときには異なるアプローチを行っている。次におくのは林逋が梅花について表した詞である。

「霜天曉角」

冰清霜潔

昨夜梅花發

甚處玉龍三弄

聲搖動枝頭月

夢絕 金獸熱

曉寒蘭燼滅

要卷珠簾清賞

且莫掃階前雪

冰清く 霜潔し

昨夜 梅の花發く

甚れの處よりか 玉龍三弄

聲 揺りて枝頭の月を動かす

夢は絶え 金獸熱し

曉寒く 蘭燼滅ゆ

珠簾を巻き 清賞するを要めん

且く掃くこと莫れ 階前の雪

「山園小梅」と比較してみると、まず「昨夜」「曉」などの語から現在の時間は明け方であることが読み取れる。灯が消えていることから長い夜が連想される。「山園小梅」では主人公はまさに「昨夜

梅花発」場面に立ち会い、梅と一対一でたわむれ合っていたが、この「霜天曉角」の主人公は夜の間は夢を見ており、梅花が開いたその瞬間を知らない。さらに笛を吹く人、主人公が「掃くこと莫れ」と命ずる屋敷の人らしき存在も示唆されており、主人公は少なくとも外面的には孤独ではない。

主人公が女性か男性か、この詞だけでは判断しがたい。しかし詞によく登場する愁いを帯びた女性と、香を炊き蠟燭を灯して独り夜を過ごした女性が空しく朝を迎え、鬱々とした思いを抱えながらせめて梅の花だけでも楽しもうと重い身体を起こす姿を想像できる。主人公が男性、または林逋自身であれば、空気の冷えてすがすがしい朝に梅の花が開いているのを見つけた主人公が、穏やかな喜びと共に鑑賞の準備をする様子か思い浮かぶ。こちらの解釈の場合には「山園小梅」に近い趣を感じるが、「金獸」「蘭燼」などのきらびやかな室内調度の描写や、詞における梅花表現として特徴的といえる「笛の音」が聞こえてくる場面などが織り込まれたりなどしてい

る。これは笛の曲に「梅花落」と呼ばれるものが存在していることから定着した表現である。林逋は笛を意味する「玉龍」という詩語を使うことで「梅花落」を連想させつつ、続く「三弄」という詩句で今度は琴の曲「梅花三弄」をイメージさせるといって、遊び心に溢れた独自の表現を編み出すことに成功している。このようなことから、林逋がかなり「詞」という文学ジャンルに自身の筆を近づけて詠じていることが読み取れる。

私たちは代表作だけを見てその詩人を理解した気になってしまいがちだが、林逋は詩と詞という異なる文学様式に合わせて、それぞれに魅力的な梅花の詠み方を生み出している。彼の中には多種多様な梅花の姿が収められていたのかもしれない。

就職活動

みなさんへのメッセージ

「卒業」と「これから」について

卒業生 KIM DONGYEOP

私たちは、様々な「卒業」を乗

り越えてきました。例えば、学校の卒業。例えば、部活の引退等々。卒業には「これから」という言葉が付いてきます。これを読まれている方々の中には、大学の卒業後の「これから」を考えないといけない瞬間に直面している方々が多いと思います。大学の卒業後の「これから」について、様々な道が与えられていますが、私はその中で「就職」という「これから」を選択しました。さて、前置きが少し長かったです。今回は留学生である私の「就職活動」を話したいと思います。

まず、現在私は出版業界で編集者として働いています。留学生の就職活動について詳しくない方が多いと思いますが、実は日本人の方々と流れるに違うものはありません。特に私の第一志望だった出版業界では、言葉というものを用いて仕事をする業界だったのもあり、普通の日本人とそう変わらない就職活動を求められました。ただ、内容的には世間でいう「普通」とは少し異なる就職活動を行ったのかもしれない。出版業界の就職活動は、何かを準備する感覚より今まで関心のなかったものにア

ンテナを張る感覚により近いものでした。例えば、ドラマの内容が入社試験に出たり、有名俳優に関する問題が出たりするなど、私は今まで勉強してきたものとは少し

方向性の違うものを就職活動で求められました。ところで、これは出版業界の話だけではなくどの業界に該当する話ですが、一番求められた能力は自分が好きなものが何かを分析し、それを究めること

だったと思います。私は昔から本が、特に日本文学や日本のエンタメ作品が好きだったので、自分の好きを仕事にできる業界をまず探し、その後、自分が好きなものより深く掘り下げてみました。昔の名作を全部読んだり、今まで興味なかったジャンルの作品を読んでみたり。なので、皆様もまずは自分が好きなものを探してみてください。そしてそれを見つけて出したら、自分なりに分析したり研究したりしてみてください。そうすると卒業後の「これから」がより明確な形で現れると思います。私がそうであったように、皆様も自分の「これから」に会えることを願っています。

「就職活動【公務員】」

卒業生 有賀 菜々美

私の就職活動は決して褒められたものではないと自覚していますので、在校生の皆さんに偉そうにお話しできることは何もありませんが、誰かの励みになれば、もしくは反面教師にしてもらえればと思います、振り返ってみます。

3年生になり、進路就職センター主催のセミナーに参加しましたが、自己分析や企業研究などは一切していませんでした。

一番の反省点は自分が評価されることを恐れ、何も行動を起こせなかったことです。就活をテーマにした『何者』（朝井リョウ）という小説の中に「頭の中にあるうちは、いつだって、何だって、傑作なんだよな。お前はざっと、その中から出られないんだよ」とあります。私自身も、自分の傑作が傑作ではなくなってしまうことが受け入れられなかったのだと思います。気がつけば夏季インターンが終わり、早期選考が始める時期になってしまいました。

このままでは就職できないとよ

うやく焦りを感じ、興味があった業種を調べ始めましたが、今からエントリーシートを作成してもずっと準備してきた人には敵わないと感じました。そこで初めて公務員試験を受験すること考えました。筆記試験に通れば誰でも同じラインに立って面接を受けられると思ったからです。

予備校に入って勉強を始めましたが、大きな問題に直面しました。試験範囲が非常に広いことに加え、試験科目の経済学や民法、社会学は、文学部の私には馴染みのないものだったので、普通に勉強しても5月の筆記試験に間に合わないと感じました。経済学や財政学など苦手科目を捨て、点が取れそうな科目の勉強を集中的に行い、ほとんどの筆記試験に合格することができました。

ここでは周りの人を意識しないことが良い方向に作用したと思っています。既に内定を持っている友人や、同じく公務員試験を受験する友人と会うこともありましたが、「自分は自分」と思うことで必要以上に焦ることなく勉強することができました。「就活は団体戦」や「就活は情報戦」の例外で

あったと思います。

面接試験についても振り返るとは多くありますが、字数の関係で執筆できなくなってしまいました。面接はあまり考えすぎず、ありのままの自分で臨んだことが良かったと思います。

皆さんが私の就活をどう評価しているのかわかりませんが、入社して半年が経った今、私はこの道を選んで良かったと思っています。ことを加えておきます。大きな挫折を経験することもあるかもしれませんが、私の経験が誰かの励みになれば幸いです。

「小さな変身」就職活動をする皆さんへ【教員】

卒業生 柚木 優理菜

こんにちは。文学部日本文学科卒業生の柚木優理菜と申します。私は4月から高校の国語科教員として働きはじめました。まだまだ未熟な私が、就職活動をする方々に向けて文章を書くのは大変恐縮ですが、少しでも参考になれば良いなと思います。

最近、私は「オリジナルの変身

大学院での日々

博士前期課程一年 下園 理紗

と交流することで、新たな見識を得たりすることが多々あります。また、授業の外でも、学会発表や講演会、展覧会などを調べて足を運び、積極的に見識を広げるようになりました。

四月に入学してから、あつという間に前期授業が終わり後期授業が始まりました。他大学から進学してきた私は本学のシステムにも慣れ、充実した設備をようやく使いこなせるようになってきた頃です。私が本学に入学した当初、強く印象に残ったのは日本文学科の合同研究室と大学図書館でした。院生として「研究」をするのだ、という緊張感や、まだ本学に馴れていない頃の印象ということもありますが、本棚に並ぶ充実した本の数々を見て、ここで学び、知識を得て、研究していくのだという実感が湧き、喜びと共に身が引き締まる思いがしたのを覚えています。大学院で学ぶ日々は大変なこともありますが、毎日が楽しさに溢れています。時に自分の勉強不足を痛感する一方で、まだまだ学ぶべきことが沢山あるのだと感じられ、学びに対する意欲が尽きることはありません。また、授業の中で、別の分野の研究をしている方

譚を創作しなさい」という課題を生徒に出しました。生徒たちの反応は様々でした。「何に変身しようかな」と発想を巡らせる生徒、黙々と文章を打ち込む生徒、「何も思いつかない」と苦戦する生徒、身近な変身譚のパロディを作る生徒：等々。最終的に提出してもらったものを見ると、それぞれの発想や工夫があり、とてもおもしろかったです。中には二〇〇〇字を超える力作もありました。

なぜ、こんなことを急に書いたのかというと、この「変身譚を書く」という課題が、就職活動に似ているのではないかと、ふと思っただからです。生徒たちを見て、はじめはなぜそんなに苦戦しているのだろうと、疑問に思いました。しかし、自由であればあるほど、「選択すること」の難しさを実感するのかもしれないと気づきました。生徒たちは「何に変身するか」という課題から、「何になりたいか」ということを無意識に考えていたのかもしれない。

以上の出来事から、人生は小さな変身の積み重ねなのかもしれないと私は思いました。採用試験で重視される面接は、小さな変身の

一歩として挙げられると思えます。私は面接対策として、予想される質問とそれに対する自分の答えをまとめたノートを作成していました。今思えば、ノートを書いていた時間は過去・現在・未来の自分と向き合う貴重な時間だったのではないかと思います。そして、大学生という身分も貴重だと思います。授業でグループワークをした際に、「コロナ禍であまり話してこなかったから、話す活動ができて嬉しい」と言ってきた生徒がいました。私たちも学生時代をコロナに奪われた世代ですが、中高生時代にコロナ禍を迎えた今の子どもたちは様々な「楽しみ方」を知らないのかもしれない、とその言葉で気付かされました。今のように学生生活を満喫して、生徒たちに楽しさを伝えられるような大人になって欲しいと思います。私もそんな大人を目指しています。

偉そうなことばかり書いてしまいましたが、いつか同じ「教員」として、みなさんと一緒に働く日が来るのを楽しみにしながら、これからも精進したいと思います。

と経験を積み重ねていき、成長していきたいと感じております。

アンカラ大学と学術協定を締結

日本文学科教授 小松 靖彦

二〇二三年七月、青山学院大学文学部日本文学科は、トルコのアンカラ大学言語地理歴史学部日本語日本文学科 (Department of Japanese Language and Literature, Ankara University) と、日本語学研究、日本文学研究の発展を目的とする研究協力を行うための協定を結びました。

二〇一九年九月に日本文学科が主催した国際シンポジウム「敬語とは何か―敬語表現の諸相―」では、本学科の澤田淳教授、近藤泰弘教授 (現 青山学院大学名誉教授) をはじめとする国内の研究者とともに、アンカラ大学のアイシエヌール・テキメン教授にはトルコ語の敬語に関する発表をしていただきました。二〇二二年には本シンポジウムの成果を踏まえた敬語をめぐる包括的な論集『敬語の文法と語用論』(開拓社) が刊行されています。

アンカラ大学は中東地域の日本語日本文学の研究と教育について中心的役割を果たしています。二〇二二年一〇月、日本語日本文学科は、トルコにおける日本語教育の普及及び日本研究の発展に貢献してきたことを日本政府から高く評価され、外務大臣表彰受賞を授与されました。

来年二〇二四年は日本・トルコ友好一〇〇年の記念すべき年です。今後も、両学科の教員による学術交流を深め、将来は、共同研究や、大学院生の交流も進めてゆきたいと考えています。

留学生の動向

日本文学科教授 山崎 藍

二〇二三年五月現在、本学に在籍している私費留学生は四九八名、うち文学部全体で私費留学生は七三名、そのうち日本文学科所属の学生は三一名で、文学部のみでは在籍数が昨年同様最多となりました。今年度新たに留学した私費留学生は九名で、国籍は中国と韓国が多いです。博士前期課程は四名、後期課程は二名在籍して

おり、国費留学生も含まれていますが。多くの留学生達が日本文学・日本語学に関心を持ってくださることが伺われます。

今年度も原則対面参加となり、留学生達が日本人学生と同じ空間で学んでおり、キャンパス内での交流も昨年度以上に進んでいるように見られます。とはいっても、コロナ前には年に二回行われていた文化交流活動も、参加希望者が少ないため今年度は中止になってしまいました。留学生とチューター、教員とのコミュニケーションに加えて、留学生と日本人学生との交流の機会やチューターとの関わり合いを密にするなどの必要性は年々増えています。今後どのような形で交流事業を行うべきなのか、来年度以降の課題となりました。

二〇二三年九月に『文学交流入門』(青山学院大学文学部日本文学科編) が刊行されました。日本文学科には「文学交流科目群」という独自の科目があり、その副読本として使われます。文学を通じて異文化間の相互理解を深めるための道しるべとして編まれた本書は、異文化に身を置く留学生の

皆さん達にも役立つものと期待しています。是非手に取って見て頂ければと思います。

最後に今年度のチューターをご紹介いたします。学部の留学生には毎年日本文学科の上級生がチューターとして指導にあたっています。コロナ禍の間はチューターの数は減っていたのですが、今年度はコロナ前の人数に戻り、四名が務めてくれています。他学部他学科でチューター立候補がない中で、本チューター達は日本文学科だけではなく英文科や史学科、心理学科などの仕事も兼任してくれ、大変有り難く思っています。以下、担当してくれた片桐卯芽さん、須田花里奈さん、濱島菜々子さん、大竹紅美さんからのメッセージです。

チューターとしての活動は、履修登録の補助など、慣れないことばかりで当初は大変でした。ですが、普段の学校生活ではあまり関わりがなかった留学生の皆さんとも知り合うことができ、貴重な体験ができたと感じています。(片桐)

慣れない環境の中でも懸命に学んでいる留学生の方々に、とても

今年度の学生の活躍

良い刺激をもらっています。実施した文化交流活動を通してお互いを知り、より円滑なコミュニケーションを図れるようになりました。学校生活の中で疑問に思うことを一緒に解決できるよう心がけています。(須田)

留学生との交流会やサポートを通して、留学生たちの意欲的に学ぶ姿勢に、刺激を受けることが多かったです。また、気軽に相談できる相手になれていたら良いと思います。チューターとして活動できたことは、貴重な経験になりました。(濱島)

履修登録などの相談に乗るだけでなく、普段のコミュニケーションも大切だと感じました。小さな不安が解消されることで、少しでも力になれていたら嬉しいです。留学生の皆さんが自身の興味を突き詰めている姿に刺激を受けました。(大竹)

チューターは留学生にとって大変重要なサポーターであるばかりでなく、日本文学科運営を支えてくれる大事な仕事です。関心を持って下さる方は是非立候補してください。

【二〇二二年度青山学院大学学業成績優秀者表彰】

◇学部最優秀賞 境田有紗(四年)
◇学部優秀賞 鶴岡文芽(三年)、荒井りな(二年)

◇学部奨励賞 二瓶杏菜(四年)、鈴木麻友(三年)、本多達郎(二年)
【杉原ウィーク2023・第24回杉原千畝記念短歌大会(岐阜県八百津町)】

◇高校生・大学生の部 勇気賞 田原袖花(三年)

この右手はいのちを奪うためではなくペンと箸と手を握るためにある
◇同 優秀作品 鶴岡文芽(三年)
地上から二メートルで争い合う僕らに世界はあまりに広い

【第18回全日本学生・ジュニア短歌大会(日本歌人クラブ主催、文化庁・毎日新聞社・東京都教育員会後援)】

◇高校生・大学生の部 優良賞 矢野皓介(二年)
鉄の蛇。ガタンゴトンと進んでは「エキ」で止まってヒトを飲み込む

◇同 優良賞 松岡真結子(四年)

「突然の雨ばかりね」玄関に家族の数より多い傘たち

◇同 奨励賞 小林大輝(三年)
雨ざらし踏まれたマスクを吸って吐く地球の息を受け止めている

◇同 奨励賞 武藤美悠(三年)
一つだけ空いたまんまの座席には僕には見えない神様がいます

◇同 奨励賞 行繩希未(三年)
きみの手がわたしの背表紙に触れたとき、この本棚の狭さを知った。

【第24回若山牧水青春短歌大賞】
◇佳作入賞 小林大輝(三年)

《二〇二二年度》(学年は当時)
【第28回「はがき歌」全国コンテスト(松山市立子規記念館主催)】

◇佳作 鶴岡文芽(二年)
浴衣姿のきみにどきどきする心映してピチャンと金魚が跳ねる
【第28回「前田純孝賞」学生短歌コンクール(兵庫県新温泉町・新温泉町教育委員会・神戸新聞社主催)】

◇大学生の部 準前田純孝賞 新井日向(三年)

ダンボールからゆらりと溶けだすふるさとの温度と匂い新聞の文字
◇同 選者賞 朝原拓海(四年)
口元が上書きされた顔ばかりマスクの下にかくれた八重歯

◇同 優良賞 松岡真結子(四年)

小舟萩(修士一年)

昼下がり優しい風に揺れているワ
イシャツみたいな自由がほしい

◇同 新温泉町長賞 三井らん(四年)

ポニテする窓際であおぐ空の虹これからわたしのほどかれる夜
◇同 新温泉町教育長賞 上條雄飛(二年)

何時からから世界は着色されていた！古写真に架かるモノクロの虹

◇同 神戸新聞社賞 佐々木美友(二年)

夜空から押しよせる波クロールで泳げば行けそう満月のうえ

【第2回「青山俳壇」(青山学院)】
◇優秀賞 本多達郎(二年)

日本文学科関係書籍

*二〇二二年一月から二〇二三年一〇月までに出版された日本文学科専任教員(旧教員も含む)、日本文学科および大学院日本文学日本語専攻卒業生が出版した日本語・日本文学・日本語教育に関する図書を紹介します。未掲載の図書については情報をお寄せください。

【お詫び】会報前号にて、情報の

誤りがありました。訂正してお詫
び申し上げます。(誤)曾倉岑『記
紀萬葉精考』↓(正)曾倉岑『萬
葉記精論』

《二〇二二年》(追補)

◆滝澤みか『流布本『保元物語』平
家物語』にみる物語の変遷と背景
―室町末・戦国期を中心に―(汲
古書院、二月)

《二〇二二年(一〇月)》(追補)

◆高田祐彦他『言語文化』(令和
四年度改訂高校用教科書)(筑摩
書房、一月)◆掛野剛史他解説『小
天地 復刻版 第一回配本』(琥珀
書房、一月)

《二〇二二年(十一月)》

◆掛野剛史他解説『小天地 復刻
版 第二回配本』(琥珀書房、
十一月)

《二〇二三年》

◆小松靖彦編『戦争と萬葉集』第
5号(戦争と萬葉集研究会、二月)

◆矢嶋泉・小松靖彦他『萬葉集研
究 第四十二集』(塙書房、三月)

◆安田尚道『上代日本語研究史の
再検討』(武蔵野書院、五月)◆

野村太一郎・杉山和也『野村太一
郎の狂言入門』(勉誠社、七月)

◆佐藤泉『死政治の精神史―「聞
き書き」と抵抗の文学』(青土社、

七月)◆廣木一人・山本啓介・松
本麻子他(連歌注釈書刊行会編)
『百韻連歌撰注釈 第一巻』(新典
社、七月)◆青山学院大学文学部
日本文学科編『文学交流入門』(武
蔵野書院、九月)◆山崎藍・稀代
麻也子・吉森佳奈子・李満紅・初
海正明他『大上正美先生傘寿記念
三国志論集』(汲古書院、九月)

院生部会報告

二〇二三年度日文院生部会代表
博士後期課程一年 西澤 駿介

新年度に行われる院生総会は、
二〇二三年七月一二日(水)に、
オンライン上で行われた。同日に
は修士論文中間報告会も開催さ
れ、今年度は内野晴菜、高爽琪、
小舟萩の三名が研究発表を行っ
た。本年度は、本部会が運営を行
う『緑岡詞林』に関する問題が、
前年、前々年度ですでに議論が尽
くされたため、本年は中心的事
柄ではなく、周辺の問題を扱う
こととなった。

まずひとつは、日文院生研究室
所蔵図書他専攻への貸出に関す

る議論である。新型コロナウイル
ス感染症の流行後、各専攻との交
流が途絶えていた。本学の院生研
究室は、複数の専攻が同居した形
態となっている。この形態の院生
研究室は、外部から入学した者か
らすれば、やや特異なものと思わ
れる。というのも、他大学の場合、
専攻ごとに完結した院生研究室に
なっていたり、そもそも院生研究
室すらなかったりする大学もある
からだ。まだ、検討段階ではある
が、こうした図書の貸借が、本学
の院生研究室の持つ可能性を広
げ、専攻を越えたさらなる交流の
一助となることを願いたい。

もうひとつは、新入生歓迎に関
する議論である。こちらも新型コロナ
ロナウイルス感染症以後、途絶え
ていた行事であった。今回はそれ
を久方ぶりに開催するかを問うた
議論であったが、開催を望む者が
少なかつたため、今年度の開催は
見送ることとなった。

いずれの議論も、新型コロナ
ウイルス感染症の捉え方に起因す
るものと思われる。

また『緑岡詞林』について、近
年論文の投稿が減少していること
に後援の方々より苦言を呈されて

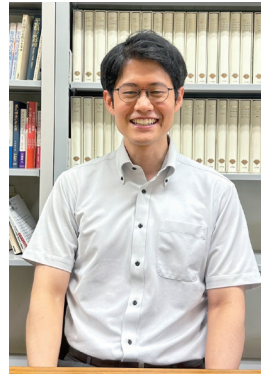
いる。博士課程の院生にとって、
論文を紀要や学内誌に提出するよ
りも、全国誌や学会誌に投稿する
ことの方が将来的な就職を考えた
場合、益あるものと目に映るだろ
う。しかし、全国誌や学会誌に載
る研究がすべてではあるまい。本
誌にも載る先鋭的な論考や学部生
の範となるような卒業論文の掲載
などは、全国誌や学会誌には作り
出せないオルタナティブな研究の
可能性を開くだろう。本誌をより
豊かなものにするための修正時期
にさしかかっているのかもしれない。
最後に、ひとこと付言しておく

たい。近年の院生部会では、総会
の出席者も減少し、活動もやや和
らいだものとなっている。こうし
た変化は、院生諸氏各々の問題と
いうよりも、新型コロナウィルス
感染症による、総会のオンライン
化や院生同士の交流の希薄化とい
う環境や構造的な要因が大きいの
ではないか。院生諸氏の主体性を
取り戻すような新たな方策を共に
考えたい。



研究室探訪

山口一樹先生編



※どのような分野を専攻して研究なさっているのですか？

主に平安時代の古典文学を研究していて、その中でも特に『源氏物語』や『うつほ物語』などの物語を中心に扱っています。『源氏物語』に関する研究というのは様々ありますが、私は作中の「女官」や「女房」と呼ばれる女性たちの描かれ方についての研究に取り組んできました。

※そのような分野を専攻なさったきっかけを教えてください。

古典の学習をしようと思ったのは、大学入試に向けての受験勉強

がきっかけです。古典の問題集の隅に載っていたコラムを読んで古

典文学の世界の面白さを知ったのです。それまでは「とりあえず、お金に関する知識を得ておけば将来のことは何とかなるだろう」という思いから商学部や経済学部への進学を考えていました。しかし一方で、せっかく大学に進むのなら自分の興味のある分野について勉強したいという思いもあつたため、この経験が古文について深く学んでみようと考えるきっかけとなり、文学部を選択することになりました。

※『源氏物語』を研究として扱うことになったのはなぜですか？

大学に入学してからすぐの頃は軍記物語について学習していたんです。実は私は日本文学科の滝澤みか先生の後輩で、滝澤先生と同じ研究班で軍記を読んだりもしていました。

源氏研究を始めるきっかけは大学三年生に上がった際に受けた『源氏物語』の研修、その時に読んだ研究論文が強く印象に残ったのです。当然ながら学生は皆同じ講義を受けて、同じ物語の同じ箇所を読んだ上で各々研究論文を書

き上げるものです。ですがその論文は他のものとは着眼点が全く異なっており、今までにない斬新なものでした。そのような源氏研究の魅力に惹かれた事を機に、自分も研究してみようと思うようになりました。

※その過程で女房や女官についての研究を始めたのですね。
そうですね。私が教わっていた指導教員の先生も女房という存在への関心を持つ方でした。その方との交流を通して、普通なら見逃してしまうような些細な部分への関心も立派な研究対象となるのだと知ったことが今の自身の研究に繋がっています。

※先生が思う『源氏物語』の魅力を教えてください。
もちろん作品自体が非常に面白いのですが、光源氏の行動や様々な登場人物の抱える切なさといった物語の描く人間像も大きな魅力の一つです。また、これまで蓄積されてきた研究の層の厚さというのも『源氏物語』における特徴にして魅力だと思います。先人たちによってなされてきた研究がより『源氏物語』の面白さを豊かにし、奥深さを持たせていると考えてい

ます。
※『源氏物語』は長い、登場人物が多く複雑である、といった理由から足を踏み入れにくいと考える人も多くいるかと思いますが、読む上でのアドバイス等ありましたらお願いします。
物語全てを読む必要はなく、読みたい部分だけを読むようにすればいいのではないのでしょうか。それは、平安時代の人々もそのように読んでいたと考えられているからです。『源氏物語』のファンであつたといわれる菅原孝標女が記した『更級日記』を読むに、彼女もはじめは断片的に少しずつ読んでおり、後に人から譲り受けたものを読んでいます。そのような人々は平安時代、彼女以外に多くいたと思いますね。

どこか一つ、一人でも好きな場面や好きな登場人物が見つければ作品自体を好きになってしまうものなので、それに会えるといいですね。ただ、『源氏物語』は一場面読むことですら大変ですので無理せず自分のペースで読み進めていくことが大切です。

※『源氏物語』はどのような人に読んでほしい作品ですか？

本当に色々な人に読んでほしい

です。この場面はこのような人に薦めたい、という部分が沢山ありまして「どのような人に」と限定するのは難しいですが、強いて言うならば苦い経験をしたことがある人に読んでほしいです。何かしらの苦しい経験を経た人や挫折を味わったことのある人は、きっと『源氏物語』をより味わい深く感じられることでしょう。またそうでなくとも、年を重ねれば重ねるほど増えていく人生経験とともにますます物語の面白さを感じられるようになると思います。

*古典が苦手な人にも読みやすい作品はありますか？

『落窪物語』がおすすすめです。継子いじめ譚と呼ばれるジャンルの作品で、文章自体がとて読みやすいですね。それに展開が劇的なのですがどこかユーモアがあつて笑える場面もあり、最後は「めでたしめでたし」で締めくくります。今でいうライトノベルや漫画というわけではありませんが、勉強というだけではなくそのような娯楽として読んで面白い作品だと思います。

*先生が研究をする上で大切に

していることは何ですか？

無理をしないということを大切にしています。源氏研究に携わっている研究者というのは本当に様々で、自分もこのような研究ができたらいいなと憧れることもあります。しかし、既存のものに寄せていくのではなく自分ができうる事を積み重ねていこうと常に心掛け、自分だからこそ書けたのだと胸を張れるような論文を完成させることができたらいいなという思いで日々研究に励んでいます。

*何か研究を通して得られた経験はありますか？

私は研究に携わるのが研究者になる人の中では比較的遅い方で、大学に入学するまでは全然文学に触れてこなかったんです。それがコンプレックスとなり、周り自分を比べて悩むこともありました。しかし論文を書き続けていくにつれ「自分が生み出したものは良くも悪くも自分だからこそできたもので、それが積み重ねることによって自分だけのオリジナル、価値のあるものが生まれるのだ」と気づきました。人と比べず自分ができることをやり続ければそれが意味になる。研究の中でこそ得

られた経験です。

*社会貢献活動として大田区くすのき古典学習会で講師をなさっているようですが、なぜこの活動をなさっているのですか？

きっかけは大学院生だった頃に、くすのき古典学習会で講師を探しているというお話を耳にしたことです。学校の授業の一環として古典文学を読むことも好きなのですが、古典文学に興味がある人やなかなか触れる機会のない人とも一緒に読みたいと思い学生の頃から現在に至るまで七年間ほど活動を続けています。参加者は仕事を定年退職された六十代から九十代の方が多いですね。

*様々な価値観を持つ人との交流ができるのですね。

そうですね。皆さんと古典を読むことも面白いのですが、参加されている方々のお言葉には人生経験を積んできたからこそその厚みを感じます。教える以上に学ぶことも多いです。その学びが自身の研究にも、教育にも結びついています。

*最後に、学生に向けてのメッセージをお願いします。

学校の中での人との出会いを大

切にしてほしいと思っています。

これは「友達をたくさん作るように」と言っているわけではありません。青山学院大学は国内だけでなく国外からの学生も多く迎えており、様々な場所からたくさんの方が集まっています。それだけ多様なバックグラウンドや価値観を持った人々がいるということなので、それらに触れることで大きな学びを得られると思います。授業においてもサークルにおいても色々な人と話すこと、思いを交わし合うということを是非とも大切にしてほしいです。



研究室探訪

大江元貴先生編



***何を専攻して研究なさっていますか？**

専門は日本語学で、特に現代日本語の文法を研究しています。日本語研究の基礎が中心なので、その過程で日本語母語話者同士の雑談の会話や、日本語学習者の作文や会話のデータを見ているので、日本語学の中だけではなくコミュニケーション論や日本語教育の領域にも関わっています。

***その分野を専攻なさったきっかけや理由はなんですか？**

大学生のときは、国語の先生になりたかったんです。そこで、教

職に関する科目の中で日本語学の授業を受けていくうちに、だんだん日本語学の方が面白くなってきて、気づいたらそのまま大学院に行っていました。元々教えることには興味があったのですが、大学生のときはまさか自分が大学院というアカデミックな世界にいるとは全く想像しませんでした。出会いですね。授業との出会いがよかったのだと思います。

***日本語学とはどのような研究なのですか？**

難しいですね……。一言でいうと、日本語に見られる様々な言語事実を客観的・相対的な視点から理解する学問ですね。ポイント是客户的・相対的な視点です。言葉遣いというのは、特に自分の母語に関しては価値判断や評価を含んで語ることが日常でたくさんあると思うのですが、日本語学というのは規範や評価基準に照らして考えるというスタンスではなく、まず、日本語の言語事実としてどういうことが起こっているのかを正確に記述したうえで、他の言語事実や言語と比較しながらより見通しのよい理解を得ようとするという学問ですね。

***言語研究の魅力はなんですか？**

私は書き言葉よりも話し言葉の文法の研究をしていて、話し言葉の文法は同じような文でも話す場面や話しぶり、イントネーションをちよつと変えることでガラッと変わることもあるんですよ。やはり言語は人間の営みと共にあるので、話し方や場面のよう揺らぎやすい要因によって文法の規則的な部分が揺らぐのは仕方ないことですが、よく観察してみると、その揺らぎ自体にもちゃんとした理屈が見出されることがあって、それが分かるときはちよつとだけ人間のことがかかった気持ちになるんですよ。言語研究はとつつきづらいう印象もあるのですが、ミクロで考えてみると規則性の中に人間くささみみたいなものがあって面白いのが魅力かなと思います。

***先生が思う日本語の魅力はなんですか？**

今話したように、日本語学は日本語を対象化して観察するという姿勢に徹するのが基本なんですよね。そうやって見ていくと、日本語ならではの言い切れる特徴は実はほとんど無くて、研究者の立場

から日本語の魅力を語るのは結構難しいんですよ。ある意味日本語との付き合い方はかなり淡泊かもしれないです(笑)。日本語学者の立場から最大の魅力というと、無いということになるかもしれないです。

***どのような研究活動をなさっているのですか？**

ここ数年は話し言葉に観察される文法現象に着目して研究をしています。具体的には終助詞や間投助詞のような話者の態度と結びつきが強い助詞の研究や、いかにも話し言葉らしい文の組み立て方の文法についての考察をしています。何が面白いのかというと、こういう文法は話者の発話態度や場面によって使えたり使えなかったりというのが繊細に分かれているんですよ。話者の態度や発話場面によって文法がどう変わっていくのか、言い換えると、文法がどれだけ柔軟で、どれだけ多様化しているのかというような姿を追いかけて、特に話し言葉の研究をやっています。

***授業でなにか大事になさっていることはありますか？**

日本語学は文学研究とスタンス

が違って、とっつきづらさを感じる学生も結構いるのかなと感じているので、理論的な話をするときにもできるだけ身近な日本語の事例をたくさんあげて、わたしたちの日々の言語生活と決して関係ないものではなく、むしろ密接に結びついているのだと学生にも理解してもらおうようにしていますね。

***今年赴任なさって、青山学院に對する印象はどうですか？**

キャンパスの雰囲気がよく良いですね。立地は当然素晴らしいのですが、明るくて自由な雰囲気です。キャンパスの中に緑が多い。校地はそこまで広くないはずなのに、建物の配置によって実際よりも広々としているように感じられ、落ち着いて勉強や研究などに取り組める環境だと思います。私もパソコンでの仕事に疲れた時、たまに意味もなくキャンパスをふらりと歩いたりするので、学生さんも一人で黙々と勉強をしたり友達同士でワイワイ喋っていたり、それぞれが思い思いの場所です。好きなことをしている感じが大学らしくて良いと思います。明るくて自由な雰囲気は青学の校風自体にも表れていて、大学は単に授

業を実施したり研究をしたりする場所と言うわけではなく、人と人が出会ってその中で新たな価値を生み出す場だと思うので、学生も教職員も活気があって互いを尊重しながら各々の関心を深めるような風土が調整されているというのは大学として大きな魅力ですね。

***学びに関して学生にどのようなことを求めますか？**

授業の内容自体をよく理解することも大事ですが、あくまでも授業は出発点でしかないのです。授業の中で習ったことだけで完結せず、それをむしろ出発点にして自分の関心がどこにあるのかということ、文学でも、日本語学でも、日本語教育でも見つけてほしいなと思います。

***授業に関してどのようなことにやりがいを感じますか？**

講義で一方的に喋るよりは、学生さんにディスカッションしてもらったり、小さな課題を出してクラスで議論したりといった機会になるべく設けようと思っている中で、学術的には未熟なところは当然あるのですが、観察している視点がものすごく鋭く、改めて自分

自身が気づいていなかったことに気づかされることがあります。私が講義をしているのですが、半分教えてもらっているところがあって、特に日本語の現象に関しては若者言葉やソーシャルメディア上の話はむしろ学生さんの方が詳しいので、色々教えてもらえるとところが授業をやっていて楽しいところだと思っています。

***先生の宝物はなんでしょう？**

人ですね。ここまで私に来られたのは様々な人との出会いの中でなので、友達もこれまでの恩師も一番大事な宝物だと思います。

***学生に向けてメッセージをお願いします。**

青山学院の日文は学問をする環境として整っています。これだけ研究の環境の整った大学にうちの中に存分に学問をしてほしいです。学問というところがすごく大層なことのように聞こえるのですが、その出発点は自分が心の底から知りたいものは何かを見つけることだと思います。自分の知的好奇心を駆り立てるような対象はどこにあるのか、授業で学んだことを踏まえて、自身の生活や友達との語りの中で時間をかけて見つけてほ

しいですね。大学は、自分が学問的に好きなことを語るのが許される稀有な場所なので、友人や教員に共有しながら関心を深めていってもらいたいと思います。学問の良いところは、社会に役に立つかどうかや他の人に受け入れられるかどうかといった良し悪しが日常生活の評価軸から解放されて、自分の関心を自由に深められるところにあります。そのような学問的に楽しむスキルはみなさんの人生を豊かにするので、ぜひ大学生活の中で学問的に楽しむ、知的に楽しむことを大いにやってほしいです。



日本文学科同窓会から

日本文学科同窓会会長

松岡 嗣直

日本文学会会員の皆さま お元気で過ごでしょうか。ところで、卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。また新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

日本文学科同窓会は昨年7月29日に日本文学科教授の山本啓介先生（99年卒・日本文学科同窓会の会員でもあります）の文芸講演会を日本文学会の後援でハイブリッド開催し、在校生と卒業生が一つの教室（17512教室）で拝聴しました。

また師走には鎌倉の梶原・長谷を中心として文学散歩を実施しました。流鏑馬や能の見学もでき、有益な一日でした。

なお、9月23日秋分の日青山学院大学同窓祭の日には「日文の部屋」というお休み処を17号館（17302教室）に開設しました。卒業50年後のゴールデンジュブリー・25年後のシルバージュブリーの方々を中心に、お茶とお菓

子で思い出話に花を咲かせました。

日本文学科同窓会の活動もコロナ禍で控え気味でしたが、今年度から平常な形になると思われます。6月1日には総会を、秋には文学散歩を実施する予定です。

そして今年9月16日の同窓祭の日に卒業生でもある詩人の伊藤比呂美さんによる公開講演会を開催したいと考えています。日本文学科の先生方や学生さん、院生さんにも是非聴いて欲しいものです。

また一昨年より日本文学科同窓会の有志が日本文学会春季大会・秋季大会に参加し、研究発表や講演を聴講させて戴いています。有益で刺激的なお話が伺えて感謝しております。

ところで、忘れてはいけないのが会報の「ひいふうみい」です。卒業生と新入生の皆さんには一部ずつお渡ししておりますし、合同研究室に在庫がありますので、是非お読みください。

二月末に刊行した第18号では、大学教員の亀井ダイチ利永子さん（94年卒）のインタビューを掲載しています。国際的に活躍されている様子を伺いました。また、先

程ご紹介した山本啓介先生の講演の模様や文学散歩のレポートも掲載されています。なお、ももいろクロバーZの作詞も行っている童謡作詞家の桑原永江さん（85年卒）の詩やエッセーも読めます。なお「青山学院校友会ホームページ」には「日本文学科同窓会」のページもあります。是非ご覧下さい。

<<https://www.alumni-aoiyamagakun.jp/alumni006/>>

二〇二三年度講義題目

〈大学院〉

上代文学研究（一）

日本文学研究の方法

小松 靖彦

中古文学演習（二）

平安文学文献講読

高田 祐彦

中古文学研究（二）

『源氏物語』精読

山口 一樹

中世文学研究（一）

『保元物語』の読解と分析

滝澤 みか

中世文学演習（二）

『続千載和歌集』研究

山本 啓介

近世文学研究（二）

浄瑠璃『傾城反魂香』精読

韓 京子

近世文学演習（二）

近世の往来物・辞書のパロディ
作品を読む

神林 尚子

近代文学研究（二）

研究テーマの展開を図る

片山 宏行



近代文学研究(二)

近現代学会発表論文の完成

日置 俊次

日本語研究(一)

現代日本語研究論文講読

大江 元貴

日本語演習(二)

古典語解釈文法研究

澤田 淳

日本語学研究(三)

言語構造と語用論

大堀 壽夫

日本語教育学演習

J・S・L児童生徒を対象とした日本語教育の課題と現状

田中 祐輔

中国古典学研究

『文選』精読

山崎 藍

日本文学演習(一)

日本文学研究の方法論

衣笠 正晃

日本文学演習(二)

文学研究の理論と方法を学ぶ

石川 巧

〈学部〉

文学研究法

日本文学研究の基礎や方法を学ぶ

石川 巧

ぶ

小松 靖彦

山口 一樹

山本 啓介

滝澤 みか

日本文学史

上代・中古文学史

高田 祐彦

中世文学史

山本 啓介

近世文学史

韓 京子

近代文学史

日置 俊次

古典文学概論

古典文学の普遍性と個別性(特殊性)を考える

高田 祐彦

近代文学概論

近世文学から近代文学への変遷の検討と把握

片山 宏行

漢文学概論

中国文学が日本文学に与えた影響について

山崎 藍

日本語日本文学情報処理法

日本語日本文学におけるデータサイエンス

山崎 藍

日本語日本文学情報処理法

日本語日本文学におけるデータサイエンス

横山 詔一

横山 詔一

日本語学概論

学術的見地から日本語を観察する

大江 元貴

日本語史

日本語の歴史について考察する

澤田 淳

表象文化研究概論

表象文化の解釈と分析

中澤 弥

日本文学入門

「日本」を多角的な視座から考える

梅田 径

日本文明史(英語講義)

日本文明史(英語講義)

孫 世偉

文学交流入門

日本の文化・文学交流

梅田 径

戦時期の日本と中国の作家交流(英語講義)

戦時期の日本と中国の作家交流(英語講義)

孫 世偉

日本文化文学入門

留学生のための日本文化文学入門

韓 京子

門

日本文学演習

詩(『萬葉集』・文学交流・戦争詩)を読む

小松 靖彦

小松 靖彦

『古事記』の精読

金澤 和美

『源氏物語』葵巻の精読

高田 祐彦

『枕草子』精読

山口 一樹

『更級日記』を読む

吉野 瑞恵

『新古今和歌集』の輪読

山本 啓介

『平家物語』の輪読

滝澤 みか

絵巻『道成寺縁起』の輪読

杉山 和也

浮世草子『懷硯』を読む

岡島 由佳

人形浄瑠璃『心中宵庚申』精読

韓 京子

浮世草子『懷硯』を読む

大木 京子

卒論を想定した発表・意見交換

片山 宏行

現代短歌の研究と実作

日置 俊次

戦後の短篇小説を精読する

石川 巧

〈校〉についての幻想文学コード検証

西井弥生子

西井弥生子

村上春樹『若い読者のための短編小説案内』輪読

山路 敦史

幻想小説における「恐怖」

富永 真樹

翻訳演習

翻訳を批判的に考察し、「日本文学」の特徴と受容を考え直す

WALLER, Loren David

中国古典文学演習

中国古典詩歌（楽府、六朝詩、唐詩、宋詩、宋詞など）の精読

山崎 藍

中国文学・思想演習

中国の古典に関する基礎的な知識の学習

名和 敏光

文学交流演習

日本文学における法・制度を精読しジェンダー論や人間・動物について学ぶ

SEN, Raj Lakhi

日本語学演習

日本語に潜む修辞性と比喩―語学と文学のはざままで―

澤田 淳

日本語教育における文法教育の位置づけを理解する

庵 功雄

文法史、語彙史に関する代表的な事項や研究方法について学ぶ

中川 祐治

日本語研究の方法論を身につける

大江 元貴

日琉語族の変異について

中川奈津子

日本文学講読

『松浦宮物語』を読む

千野 裕子

南方熊楠の説話学をたどる

杉山 和也

芥川賞から見る戦後日本文学史

帆苅 基生

上代文学の代表作品を原典で読む

孫 世偉

狂歌の歴史を知る

牧野 悟資

中国古典文学講読

中国文学作品を分析し、中国文学への理解を深める

山崎 藍

日本語学講読

日本語学の理念と研究手法を学ぶ

庵 功雄

書道の歴史と実技

書道の歴史をふまえた基本的事項の理解と技法の習得

山下 由季

永田 徳夫

日本語教育概論

日本語の授業を行うために必要な知識や技術について学ぶ

田中 祐輔

日本語教授法

日本語非母国語話者に日本語を教えるための必要な基本知識を学ぶ

川端 芳子

特別演習

『萬葉集』・書物学・文学交流に関する卒業論文作成指導

小松 靖彦

平安時代の文学作品を主たる対象とした卒業論文作成指導

山口 一樹

平安時代の物語・和歌を対象とした卒業論文作成指導

高田 祐彦

短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導

山本 啓介

主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導

滝澤 みか

近世前期の文学を対象とした卒業論文作成指導

韓 京子

近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導

大屋多詠子

近現代文学を対象とした卒業論文作成指導

片山 宏行

近現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導

佐藤 泉

卒業論文作成指導

日置 俊次

主に中国文学を対象とした卒業論文作成指導

山崎 藍

日本語学を対象とした卒業論文作成指導

大江 元貴

日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導

澤田 淳

日本語教育に関する卒業論文作成指導

田中 祐輔

日本語教育演習 A

日本語教育と教材・教具について理論的、実践的に学ぶ

田中 祐輔

日本語教育演習 B

教科書分析や教室活動体験から日本語を教えることを考える

木田 真理

日本文学特講

日本の伝統文化／近代文化と文学

小松 靖彦

古今集歌の表現

高田 祐彦

『源氏物語』正編の読解

山口 一樹

京極派歌風の展開とその後

山本 啓介

『保元物語』の成立と展開／中

滝澤 みか

近世前期怪異小説の類型

岡島 由佳

『修紫田舎源氏』を読む

神林 尚子

菊池寛の小説を読む

片山 宏行

日本近代文学〈散歩〉の表象

山路 敦史

横光利一研究―短編小説の世界

日置 俊次

古代文学についての理解を深める

金澤 和美

文学交流特講

世界の中の日本演劇―能を中心に―

竹内 晶子

日本文学とアジア

中国文学と日本文学の相互影響

戸井 久

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ

世界各地の神話について

沖田 瑞穂

表象文化論

能と狂言について多角的に考える

岩崎 雅彦

演劇（人形浄瑠璃・歌舞伎）に

描かれた事象を表象という観点から分析する

韓 京子

「表象文化論」の概要を把握する

大山 英樹

日本文学特講 A・B（英語講義）

日本の伝統工芸や美術／近代化や工業化についての体験を通して、日本文化を深く理解する

孫 世偉

中国文学・思想特講

中国文学や思想を身体と感覚に関する視点から読み解く

松浦 智子

「漢字とは何か」について考える

戸内 俊介

中国古典文学特講

唐詩の読解を試み、唐の社会や詩人の人生、唐詩への理解を深める

山崎 藍

日本語学特講

現代日本語に現れるレジスターの実態を把握する

大江 元貴

日本語の特質を探る―ダイクシ

スからみる日本語―

澤田 淳

日琉語族の変異について概観する

中川奈津子

日本語教育特講

日本語教育の歴史を概観し、課題と展望について学ぶ

田中 祐輔

日本語教育実習

日本語教育実習の実践的スキルを身につける

牛窪 隆太

日本文学研究のための英語

日本文学の研究に役立つ英語力を伸ばす

WALLER, Loren David

音声表現法

日本語学習者の発音から日本語の音声のしくみを学ぶ

木下 直子

文章表現法

読み手を意識した文章表現の実践・文章技術の向上

木村 寛子

【研究室だより】

*二〇二三年三月の卒業生は一二五名、四月入学生は一四〇名でした。大学院前期課程の三月修了生は七名、四月入学生は五名でした。後期課程の修了生（論文博士）は一名、四月入学生は三名でした。

*二〇二三年度から新たに非常勤講師として、牛窪隆太、神林尚子、戸井久、中澤弥、名和敏光、山路敦史、横山詔一の諸先生方にご尽力いただいています。

*二〇二三年度は、澤田淳教授が学科主任を務められました。
*二〇二三年度は大屋多詠子教授が国内研究（東京大学）、佐藤泉教授が特別研究（青山学院大学）のため休講なさいました。

*二〇二三年度日本文学会大会（春季・秋季）・講演会・総会が、六月十七日と十一月二十五日に開催されました。講演会については本会報三頁をご覧ください。

*田中祐輔准教授が、グッドデザイン賞（書籍『日本語で考えなくなる科学の問い』による）を受賞されました。
*大江元貴准教授が、日本文学学会論文賞を受賞されました。

論文賞を受賞されました。

*小松靖彦教授が独立行政法人国際交流基金の日本研究基盤整備プログラムのお客様教授としてインド・ビショバロテイに派遣されました。

*二〇二三年九月に『文学交流入門』（青山学院大学 文学部日本文学科 編）が刊行されました。

*副手の本田恵さん、北川遥香さんが退任され、渡辺降さん、内藤未希さん、成田由紀子さんが着任されました。

*二〇二三年四月より、中古文学がご専門の山口一樹准教授と、日本文学がご専門の大江元貴准教授が着任されました。

*二〇二四年三月をもって近代文学がご専門の片山宏行教授が定年のため退職されます。

編集後記

はじめに、「会報」の作成にご協力いただいた全ての方々に、厚く御礼申し上げます。

今年度の「会報」は、二〇二三年度に着任された二名の先生に研究室探訪を行わせていただきました。インタビュー形式の研究室探訪は、先生方のことを日々の授業とは切り離して知ることができる

記事だと思えます。前年度につき、今年度も「会報」の作成に日本文学委員が携われたことを喜ばしく思います。

二〇二三年度は、コロナ禍以前の大学生活が戻りつつある状態だと思えます。対面授業やオープンキャンパスなど、人と会う機会も多くありました。大学まで足を運んで授業を受けることは、とても貴重な時間だと思っています。学内には美しい植物があることを先生方が教えてくださいました。

キャンパス内を見渡すと、植物をはじめとした美しい景色が校内にあると分かりました。春は桜が咲き、夏は木々の緑を見ながら虫の声を聴き、秋に銀杏を愛で、冬はクリスマスMASの装飾を見つつ、各自が思いを巡らせます。雪が降った日に学校へ行ったこともありました。少し前までは、暖かそうな色合いのクリスマスMASの装飾に身を包んでいた大きな木にとって、積雪は過酷なものであったかもしれません。道が滑りやすくなっていたため登校自体は苦労しましたが、雪が魅せる校内の景色を堪能できたので良い思い出です。

日本文学会の春季大会も、無事

に開催されました。日文学委員会の活動も、コロナ禍以前の賑わいを取り戻しつつあると思います。また、今年度は新入生の加入が多かったこともあり、私が経験した中で、日文学委員の人数が最も多い年となりました。青山祭に向けての準備などで委員と顔を合わせる機会も増え、活動頻度も増えました。先輩方が受け継いでくださった日文学委員会という響をつなぐために、今後も尽力してまいります。（北村結子）

編集委員

教員

山崎 藍

学部三年生

北村 結子

学部一年生

熊井 花音

嶋崎 花音

廣井 麻央

小林 愛佳

橋田 梨香

山田 美玖

会報 第五十八号

二〇二四年三月一八日 発行

渋谷区渋谷四一四一二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科学研究室内

編集 青山学院大学日本文学会

電話 (〇三)三四〇九一七九一七

FAX (〇三)三四〇九一八〇〇五